

# 中央情報通信

発行日 毎月15日

大日本生産党機関紙

第1409号 令和6年5月15日号

|                                   |   |
|-----------------------------------|---|
| 日米は今後「インド離れ」を進めるのか……………本紙編集部…………… | 1 |
| 神職がいなくなる日……………                    | 2 |
| 激増する`空き家、をどうするか……………              | 2 |
| 中共解放軍が生物兵器を使う日が近い!?!……………         | 3 |
| <b>読者投稿</b> 能登半島地震 現地の声〈第2回〉…………… | 3 |
| スパイスの歴史は医学の歴史……………                | 5 |
| 韓国の大学生が病んでいる……………                 | 5 |

本 社 〒847-0871 佐賀県唐津市東大島町 19-5  
電話 090-3199-8446 no.shin.7771008@gmail.com  
賛助購読料 年額 3,000円 (年10回発行)  
ホームページ <http://大日本生産党.com/>

発 行 所  
**中 央 情 報 通 信 社**  
編集長/谷田 透

# 日米は今後「インド離れ」を進めるのか

本紙編集部

中共の一路が進められ始めた時から、日米は中共牽制の為にインドとの密接な関係を構築し始めた。安倍首相は積極的に「自由で開かれたインド太平洋同盟」をぶち上げ、インドを盛んに支援し始めた。日本国内の「印僑」を團結させて日印の強固な経済関係を完成させようとして、既に日本国籍を取得している印僑のホテル王を特別待遇にして、インドからVIPが来日すると安倍首相の横には彼が坐っているような関係も表面化していた。いくら中共を叩きたいからと言って、そこまで印僑に入れ込むのも如何なものかと批判の声が出ていたほどだった。

阪神大震災までは印僑の大半は神戸市と芦屋市に住んでいたが、安倍首相が利用していたホテル王は沖縄に住んでいた。つまり、本来の印僑とは一線を画していたのである。安倍首相は、華僑にしても鄧小平以降の連中（新華僑）を利用しており、本来の「落地生根」の老華僑ではなかった。ニューカマーの華僑や印僑を利用していた彼が、誰から指示、要望されていたのかは不明のままである。

さて、日米がインドを重宝し始めるのと軌を一にして、**モディ首相**は「ヒンズー教の原点回帰」を言い始めた。カーストの厳格化を基本に、ヒンズー主義を復活させることを公約し始めたのである。

カースト制は元来、特権長者マハラジャの下に、宗教階級のバラモン、貴族や騎士階級のクシャトリア、商人や一般市民を表わすバライシャ、肉体労働者や被差別階級を表わすシュードラ、シュードラ階級は上位のカーストと目を合わせてもいけないとされていた。更にその下に最下層のダリットが日本のエタと呼ばれる位置づけにされている。人の姿をした獣はチャンネルダラと呼ばれ、道端で死んでいても「見たら目が腐る」と言われていた。このような厳格なカーストは二十一世紀の人権感覚と相容れるとは思えない。日米欧の先進国は内心モディ首相に反発を感じながらも、習近平の方が憎らしいので我慢していた。



モディ首相を支える支持層はカースト上位者が多い。アメリカのIT産業界が、カースト下位の若者で数学に長けた連中をスカウトして仕事をさせ、数年間でインドの故郷にビルを建てるほど給料を与えたことを、彼らは苦々しく思っていた。カースト下位の若者がアメリカに移民するのなら構わないが、金持ちになってインドへ帰って来るのでは「反カースト」であり「反ヒンズー」だと激怒した。実際に、カースト上位の家が平屋の木造で、下位の家が三階建ての鉄筋コンクリートという笑える話も聞いた。これでは保守（守旧）層は黙っていられないだろう。モディ政権は、インドが伝統的にロシアと軍事同盟を組んでいたことを利用して、日米に「インドが仲介してロシアと和解させる」という絵空事を唱え始めた頃から、

日米は鼻白み始めた。どちらも前政権の置き土産の関係を直したかった処に、モディ政権のヒンズー教原点回帰の路線が出て来たので、これ幸いと距離を置く口実を見つけたと言える。

アメリカは十一月の大統領選挙でトランプが返り咲くことになれば、習近平は「君子豹変」して日米と和解する路線に転換し、インドを一気に遠ざけることになるだろう。

中共としては、日米と喧嘩して国際決済機関から外国為替の決済時間引き延ばしの圧力や嫌がらせを受けたくないので、半歩先を見据えて行動したのである。日米とは良好な関係には戻らなくても「心地よい緊張関係」を保っていきたいと考える。それが冷戦一歩手前の状態であり、最も軍産複合体が儲かる体制だからだ。

日本も岸田政権が武器輸出三原則を変更し、米欧に並んで軍産複合体が基幹産業になる準備に取りかかった。やはり、伝統的に不景気を逆転するのは軍産複合体の貿易であると気付き、日米欧は口実を見つけてインドを遠ざけ、中共の野望を挫くという大義名分はそのままに、新しい国際関係を構築するのである。

鄧小平はいつも言っていたものだ。貧乏人が金儲けしたければ「銭の方だけ見て進め」と。

# 神職がいなくなる日

神社界では、既に神社の収入だけでやって行ける所は全体の1割しか無いと言われている。特定の大神社や観光神社に「就職」する若手神職が、田舎の賽銭も地鎮祭も無いような貧乏神社に「奉職」するかと聞かれたら、それが神社界の現在抱えている大きな問題だと理解できる。

皇學館や国学院を卒業して神職の資格を取って、さて地元へ帰って小さな神社に務めようとかと考えたとして、給料はどうなるのか。神社は儲からないという現実の前では、若手神職の将来は決して明るいものではないのである。

大雑把な数字だが、全国に九万の神社があり二万人の神職が居るとして、一人でお祭りする(面倒を見られる)神社はどれくらいになるのか。大きな神社に取り込んで、境内地に摂社や末社として置いてあれば手間はかからないだろうが、実際には別の場所にあつて、氏子の世話役が掃除や管理の回り持ちをしている所に、神職が兼

## 激増する「空き家」をどうするか

最近の統計では、日本国内の空き家は九〇〇万軒を越えたそうだ。理由は様々で、独居老人が死去して相続されずに放置されている場合を筆頭に、個人的な理由が上位を占める。だが実際に空き家を再活用する場合、どのようなハードルがあるのかは世論として真剣に考えねばならない処まで来ているようだ。

空き家を活用する場合と、建物を撤去して更地を活用する場合に対応は違うが、危険建物となるのを、空き家として人が住まなくなつてから十年として考えれば、再利用できる建物はすぐにもリフォームを考えるべきかもしれない。そこに政治が乗り出すべきポイントがありそうだ。

まず税金問題として、建物の相続税と固定資産税が払われていなければ売却してリフォームなどは出来ないが、税金問題は空き家対策とは別次元で動いているのでハードルその①になる。建物を解体する場合にも、公費解体と私費解体では手続きも何もかも違うし、空き家対策に自治体の予算がついているかどうかはハードルその②だ。空き家をリフォーム

務として例祭などのお祭りをしつてゆくことにな

る。  
兵庫県の丹波篠山では、佐佐婆神社の宮司は「兼務社五十三社」という日本記録を持っている

そうだ。秋祭り等の集中期間には、毎日三社ほどお祭りをして回っているという。地方によれば、氏子が回り持ちで装束を身に着けてお祭りをしてる所もあるが、神職の資格が無ければお祭りをするのは駄目だという声もあるだろう。

「神社の企業努力が足りないから収入が増えないのだ」という新自由主義の洗礼を受けて、今神社界は滅亡しつつある。給料がもらえないなら、神職になる人は居なくなる。そんな日は、それほど遠くなさそうだ。

ムする時に業者はいるのかという問題で、大手の業者ではなく近所の工務店となると驚くほど少ないのが現状だ。大工や工務店の減少がハードルその③である。リフォーム住宅に移住してくる人に対して、定住や開業の応援があるのかどうかで、単にリフォーム中古住宅を賃貸する不動産屋の案件になつてしまう。ここがハードルその④である。これらが全部クリアできなければ、空き家対策は進まない。と解つている人がどれだけ居るだろうか。



空き家に関する個人の問題が振り出しになるのだが、そこで足踏みして先送り続けていると何も解決しないことになる。政治家も行政も「民法に介入するのは適当でない」と必ず逃げるので、今後空き家は増えることはあつても減ることが無い。

空き家の再活用法案を国会に提出してから、世の中はゆつくり動き始めるのかもしれないが、第一段階の「法案提出」に向けて、政治家は実態の問題と将来的な問題を分離することなくセットで考えてもらいたいものだ。



# 中共解放軍が生物兵器を使う日が近い!?

コロナ事件では、武漢の海鮮市場が発生源だとする世界的な研究があったのにもかかわらず、ウイルスを作った研究所が何処なのかという議論で意見が分かれ、「中共原因説」は燃え上がらずに鎮火してしまった。トランプ大統領は、それでも「チャイナバイルス（中国ウイルス）」と言い続けたが、バイデン大統領になって言論封鎖が厳しく行なわれた。中国で儲けようとする民主党のスポンサー筋が、中共を庇いきったのである。

習近平は安堵し、武漢生物研究所移転とアメリカとフランスの教育を受けた研究員の移動を命じ、ウイルス研究の本体は武漢理工大（写真）にひっそりと移された。

日本では当初「武漢ウイルス」として認識されていたが、決定的な証拠を握っていたアメリカとフランスが武漢研究所のウイルス研究の基礎を作ったことを隠し通すために、ウイルス発生源を曖昧にする決着を望んで「新型コロナウイルス」という表現で着地させたのだ。



国際的な認識として、コロナで死亡した人数は数百万人以上あるいは一千万人と見られているが、中国やインドのように「死亡原因を単なる病死とする」政策の政府がいくつかあり、コロナ患者の死亡と特定することが不可能だということだ。今回のウイルスは人工的に合成されているので変異速度が速く、致死性が薄れる六回の変異を過ぎてからは単なるインフルエンザと同等にまで危険性が下がっている。武漢でも、最初の現場となった海鮮市場は解体されて移転しており、今では「歴史の話題」になり果せている。

実は最近、武漢理工大学のウイルス研究所が解放軍と提携していることが話題になっている。軍産学複合体は世界の流れだが、問題は武漢理工大学のウイルス研究所がコロナウイルスを改造してマウスで培養し、目的攻撃型のウイルスを完成させたという内部資料が見つかったことだ。このレポートによれば、この新型コロナウイルス兵器は「特定の遺伝子に強く反応する」とされている。狙った人種や民族をターゲットにする兵器に進化させたと言うのだ。特效薬や予防ワクチンの完成を待って大規模培養に回されるようだが、解放軍がこれを使用すると見るのが一般的だ。

習近平の最終目標とされる世界制覇の為に、アメリカの軍事力を沈黙させるだけの恐怖が必要だと言うのが解放軍の見解だが、ポンコツのミサイル、戦闘機、空母などで飽和攻撃するぞと言っても、恐れるのは近隣諸国だけである。遠く離れたアメリカが震え上がる恐怖を与える為には、やはり「生物兵器」が一番なのだろう。

先のコロナの時には、隔離・封鎖というのが世界的な予防パターンとなったので、今回の新型コロナウイルスを台湾に撃ち込んで伝染させると、台湾は事実上孤立して餓死する道を転がることになる。台湾がアメリカや日本から見放された処を見計らって、中共が特效薬を持って上陸して治療すれば、台湾は中国の軍門に下ると計画してもおかしくない。

警戒レベルを引き上げて、武漢理工大学と解放軍を監視するべきだろう。

読者投稿

## 能登半島地震

## 現地の声〈第二回〉

田丸政盛

迎りも暗く冷え出した。家内と外に出るも、近所は死んだように静かである。

車にて国道に出る。道沿いにローソン、平和堂、ファミリーマートがあるが、ローソンと平和堂は元日休業。インフラは道路、上下水道、電気、鉄道、その他全て不可。

次は人の把握に入る。年中無休のコンビニはどうかと、十五分位観察する。店員も客も不安と恐怖でパニックである。祝いの日が地震に豹変したため本道の往来、駐車場共に右往左往である。

さて、店内はスシ詰め、カゴ一杯に品を詰めてレジで待ち惚けの態である。一方店員はと見れば疲労の色が濃厚で、腰は九〇度位に曲がり手足が硬直している。体力の限界とプレッシャーのせいで腰は痛める事必定、これでは彼らが疲弊してしまうと考えた私は、一計を案じレジに割り込みタバコを頼んだ。一斉に客の視線が集まり満面に憎悪が見える。人は軽いフェイントで常時の化けの皮が剥がれる。皆一様にこぞとばかり「常識な」と悪態をつく。だが自分達の足許は見えて

いない。買い物と言うより漁りであり、集団心理とはかくも脆いものだ。

人心がだいたい読めたので長居は無用。車に戻ると私に因縁をつける輩が来た。そのくせ、私が立ち上がると逃げる。そして離れた場所からまたしても「非常識な…」の連発である。矛先をこちらに向けるだけで、正義と常識にすり替える事は容易い。大衆心理の見物にうってつけだ。

何もからかっているのではない。インフラ、人物流を一番に把握しなければ後に響くからである。私が自衛官をしていた頃の「斥候」に近いと言えようか。

このコンビニだけで言えば、懸命な応対に当たる従業員だけが一番の被害者だ。諭えてみれば言わばボランティアであり、炊き出しであり、現地を把握するのに手一杯なのである。「しんどいけど頑張つて」と伝えると「ありがとうございます」の一言である。顔面蒼白、疲労困憊で倒れなければと願う。

後日「あの時はありがとうございました。助かりました」と言われたが、お互い様ですと返す。私は応対の従業員に僅かでも手を休ませたかったのである。他人であるがその場の阿吽の呼吸というものだ。共助とはまさにこれである。



◆ 帰宅道中、どこもかしこも異様

私見であるが、コンビニでの出来事は手を組める人、そうでない人がはつきり判断できる。無論、従業員は前者である。高度な訓練は二の次だ。これにて長居は無用。

### ■家族の安否

結論から、母は輪島市門前町の孤立集落で途方に暮れていることは容易に想像がつく。

妹は年末から一日昼まで帰省していたが、仕事の都合で帰宅の車中で穴水町のかかなり急勾配の山中にて被災していた(後日わかったことだが)。道路が割れ、身動きがとれず立ち往生していた。

過去の能登半島地震と同じ所なので私には解る。当時は父も存命だった。父母の安否確認の為、加賀から出発したが、今回の妹と似たり寄ったりの所で道割れ陥没の為、徒歩で向かった挙句、集落はおろか近辺の黒島、鹿磯など人っ子一人おらず帰った覚えがある。後日、父母から大目玉をもらったが…。山頂より片道三〇キロ強あるがバテた。帰路は登りで、往復合計六〇キロを歩いたものだった。

今回、登りの山頂辺りで妹が被災した事になる。一夜を車中で過ごし、同様に道中被災した方と連

携し脱出したという。観光、帰省問わず知らない者同士が助け合い、何とか逃げたとの事。別れ際、お互い頑張ろうの言葉で涙が出たそうだ。今だから言うが、妹は「生きた心地がしない、地獄とはこんなのかな…」と感想をもらしていた。二度と御免で気の動転が暫く収まらず、母や私の安否も心配で眠れなかったとの事。

この時点で家族の安否は取れなくなっていた。母は避難、妹は帰宅途中、私は家内と母の所に向かう流れである。

さて母の所は困難を極めたが、とても集落には入れない為、一旦帰宅することにした。主な道が寸断され、巨大な落石が目の前にあり、家内と同伴では不可能。単身であれば何とか自信は無くもないが、前回同様何も出来ないのだ。家内に負担をかける訳には行かない。引きあげるしか無い。

辺りを確認する。津波で一変しており我が目を疑う。家内の目には涙、嗚咽の感だ。気丈さで持っているだけである。私はと言うと、静かに傍観してて我が身が憎らしい。生まれつきか自衛官グセか判断しかねる。何と言うか「ままよ」と言う風である、個人の感情が湧かないのである。

で無惨な光景、いくら筆があろうと足りない。

さて、阪神淡路では私の同期隊員が長田に向かった。東日本では岩手の知り合いが被災した。折悪しく前年、新築と同時に助成補助でオール電化にしたばかりだった。当然使えず、震源の事もわからなかったそうで、食糧が無くなりガス管割れでライターも使えず、家族で不安に過ごしていたそうだ。タバコがないので手配したが、陸送まで日にちがかかった。当時タバコの規制があった事を覚えている方はいるだろうか？

震源では懇意にしていた空自の司令が被災地向かった、当時は中隊長。現場組であり防大同期で畑は違うが被災地で司令と同じく指揮を取っていたのは村井知事である。司令はよくあるパイロット上がりではなく、裏方の補給と兵站であり、エリート組ではないが日本の矛盾は理解している。村井知事も現場叩き上げで、キャリアをドブに捨てた変わり者と言われているとか。

東京では新宿から所沢まで線路を歩いて帰宅した知り合いがいる。神奈川では自社ビルがクラックによりダメになった。私は発生時大阪駅にいたが、かなりの横揺れであった。

いずれにせよ今回の地震もとうとう五月になり、「咽喉元すぎれば熱さ忘れる」にならぬ様、初心に

## スパイスの歴史は医学の歴史

スパイスやハーブに関しては、調味料や香りづけとして現代人は見ているが、そもそも全部が薬草だったのである。これは世界的に共通している。

紀元前一三〇〇年頃にエジプトで始まったようだが、それがギリシャに伝わって大きく発展したようだ。どの草や木の実が、どんな体の不調には効くのかを蓄積しながら、薬草文化は医学と違って大陸を東に進み、インドや支那で宗教とも一体化して完成に近くなった。

日本では、推古天皇が自ら薬草を採りに行かれたことが日本書紀にも書かれており、その後の遣唐使が支那で学んだ教養と日本独自のものが渾然一体化して学問となった。当時から、ニンニク、生姜、山椒は薬として書かれている。正倉院にも、丁字、胡椒、桂皮は納められている。

九二七年には薬草栽培が始まったとされ、シルクロードから西方の薬草や医学もどんどん入り始めた。

十五世紀になってスペインとポルトガルが大航海時代を始めてから、スパイスやハーブの奪い合いが始まり、それが元で戦争も起きている。ヨーロッパ人が薬草を料理に使うことを日常化させたことの裏付けである。

日本では八代將軍吉宗が、江戸庶民でも薬草を利用できるようにと栽培を進め、漢方医や採薬師を養成したそうだが、内科的な漢方医学と外科的な蘭方医学は対立したまま明治まで続いている。解体新書などの外科的な知識は蘭方医学だが、その実質上の先生だったのは「腑分け」の出来た力ワタと呼ばれるエタ身分の職人たちだった。薬草の使い方も、修験の作法がシノビ筋に伝わって大和・伊賀・甲賀などで花開いている。官製の知識ばかりでは何事も前には進まない。

奈良文化財研究所では、藤原京の時代に最先端の医療チームが存在し、それらは薬草のエキスパートだったという事実が、発掘された木簡から明らかになっていると話す。飛鳥や奈良の時代に、最先端医療の中核はスパイスとハーブだったのである。



戻りたい。日本は戦後の平和と繁栄のしっぺ返しをくらった。厳しい、全てに於いて… (つづく)

香辛料を多用する料理は、実は薬草文化と同時に「医食同源」の最先端だったのかも知れない。そのことを知った上で、スパイスやハーブを見直したいものだ。

## 韓国の大学生が病んでいる



先日、韓国の大学の先生に聞いたのだが、韓国には大学が三〇〇校ほど有るが、昨年度だけで、その内の二八〇校で学生が自殺しているそうだ。卒業後の将来を悲観しているという理由がトップだそう。これは尋常なことではない。少子化は、日本では合計特殊出生率が一割を切ったと言っているが、韓国はそれ以下の〇・七二である。三〇年後には韓国人は大陸の少数民族と同じ規模になる。

最近の韓国の大学生に共通するのは、無気力で苦勞することを嫌がることだと言った。それが自殺者の多さと関係しているのは明らかだ。

韓国の大学生は非常に厳しい競争社会に有り、その競争に耐えられないというドロップアウトが超ストレス社会に拍車をかける。「韓国人であることがストレスだ」と叫ぶ大学生も激増しているそうだ。ある調査では、韓国人をやめたいと思っている大学生は三〇%を越えるそうだ。

既に韓国の大学では「死の文化」という教育が行なわれ始めている。生きることに関心だった三〇年以上前の韓国人の姿は無く、人間関係もほとんど希薄になっている。かつて「殺しても死なない」と言われた韓国人も、今では二〇代三〇代の自殺者数が世界一になり、「放っておけば死に絶える韓国人」と自虐的に若者たちは言っている。

ソウル等の都会では、祖父母と暮らしたことがある大学生は少なく、人の死を身近で経験したことが無い人が増えた。そして大学を卒業すれば、家から独立しろと親から言われるので、独居になる若者が増える。まともな就職先も無く、結婚も出来ないの、独居青年はそのまま独居老人になってゆく。

話を聞いた先生の所では、全ての事に感謝して他人の為に働く学生に共通するのは、臨死体験のあることだそう。韓国大学生は、臨死体験をしなれば立ち直ることが出来ないのなら、それは悲し過ぎることである。

我が国も他山の石として省みるべきだろう。